

稿できていない状況で、これらSNSの更新を代行下さるボランティアも募っています。ご協力可能な方はお申し出お願いいたします。
其の他、ご不明な点がございましたら、お気軽にお問合せ下さい。

日に日に寒くなって来ました。皆様、風邪などに気を付け、お元気にご活躍下さい。
皆様の今後益々のご多幸を記念申し上げます。

(一般社団法人)子ども電話 童神
理事長 田里友邦

2. Q&A

沢山の皆様より貴重なご提案やご質問を頂いています。
お寄せ頂いたご質問やご意見の内、多くの方からお寄せ頂いたご意見・ご質問をご紹介します。

Q1 「どこの誰か分からない人に相談する人はいないんだから、若年者から信頼してもらえる様に、食事提供や学習支援、動画配信、何らかのイベント企画をするなど、電話を受ける人の「顔が見える＝人柄が伝わる」活動をすべきではないか？
電話を受けるボランティアの氏名を匿名とすることが理解できない。

A 一般の方々がそうお感じになることは自然なことかと思えます。
私たちの目指す活動は、類似の活動に長年取り組まれているいのちの電話さんやチャイルドラインさんにつながる方向けの補完活動です。
いのちの電話さんもチャイルドラインさんも大変意義のある活動をされています。
ただ、いのちの電話さんは365日24時間、活動をされていますが、相談員の不足などから電話が慢性的につながり難く、
チャイルドラインさんは一部の団体を除き原則として16時から21時までの活動です。

もしいのちの電話さんやチャイルドラインさんが24時間365日活動をされていて、

電話を受けるボランティアも十分な人数がいていつでも電話がつながる状況であれば、

私たち子ども電話 童神のレゾンデートル(存在意義)はさほどないと思います。

現実にそういう状況でなく、生き辛さを感じ、特に深夜に孤独感を感じている若年者がいる現状を踏まえ、両団体の補完的活動を行うために、せめて毎週日曜日の夜から月曜日の朝と、クリスマスイブやクリスマス、大晦日、元旦の深夜だけでも活動を行おうと、当法人を設立いたしました。

そういう経緯を考えると、

- 相談する側もされる側も匿名、電話を受ける場所も非公表
- 秘密厳守
- 原則として指導や説教、教育は行わず、
「気持ちを受け止め、共に考える」ことを大切にする
- 直接支援は行わない(連絡先を交換して直接会うことは厳禁)

など、両団体に共通する最低限の原則は、私たち子ども電話 童神でも重視いたします。

知っている人にだからこそ話せることがある一方、逆に、知らない人にだからこそ話せることもあります。

知っている人にこそ話したい方は、身近な方々や、氏名を明かして活動されている方へ、

知っている人には話せないけどでも誰かに聴いて欲しい方はいのちの電話さんやチャイルドラインさん、そして私たち子ども電話 童神へ。

警察や病院・役所への動向や食事の提供、其の他、直接支援ができる人や団体は氏名を明かしての活動が望ましいかもしれません。

一方、「ありのままの相手の気持ちを受け止める」ことはいくら研修をしても容易いことではなく、プロのカウンセラーでさえ、多くの場合、1回のセッションの時間を50～90分に区切っていますし、『二重関係の禁止(親族や友人へのカウンセリングの禁止)』がほとんどのカウンセラー団体の倫理綱領で定められています。

プロでない私たちボランティアであればなおさら、最新の注意を払うのは当然です。

私ども法人では、個々の電話受け手ボランティア個人としてではなく、組織として責任を持って電話を受けることから、匿名の原則を大切にしています。

どちらのほうが正しい・間違えではなく、電話をかける側・受ける側、各個人・その時々状況に応じた選択肢が豊富にあることが望ましいと考えています。

Q2 今の若年者はlineなどのSNSに慣れていて電話に慣れていないため、電話ではなくSNSを活用して話を聴く必要があるのではないかと？

A SNSで話を聴く活動にも大きな意義があります。

座間市での殺人事件を受け、SNSを活用して相談を受ける活動が広がっています。

一方、文字情報だけでは伝わりにくい思いを、声を聴くことで受け止めることができる利点が電話にはあります。

SNS・電話・対面それぞれに長所・短所があり、若年者自身が選択できることが望ましいと考えています。

来年度以降、メールやlineで相談を受ける活動を開始することも検討いたしますが、電話を通して気持ちを受け止める活動の必要性は今後もあり、

人員体制なども考慮しつつ、両立できる様、目指してまいります。

Q3 週1回の活動日では間が空き過ぎ。「今聴いて欲しい」という思いに答えることが大切ではないかと？

A 私どもも理想は365日24時間活動することが望ましいと考えています。

一方、人の話を真剣に聴くことは傾聴の知識やスキル、相手に寄り添う姿勢に加え、体も心も元気でなければできません。現在、限られた人数で電話を受けているため、本活動日を毎週日曜日及びクリスマス・イブ・クリスマス・大晦日・元旦の夜9時から翌朝7時としています。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、多くの方が不安を感じている現状を踏ま

え、5月から9月には平日の同時間にも電話を受ける活動を行いました
が、活動を長く続けるため、現在は、平日は本活動日としてではなく、
緊急ダイヤルとして受けています。

本活動日に電話を受ける際は、事前に仮眠を取り、体調を万全に整え、
所定の場所で電話を受け、集中して聴く体制を目指していますが、平日の
緊急対応日に関しましては携帯電話に転送し、可能な範囲内で受ける体
制としています。Q1でも述べました通り、私ども法人は、いのちの電話
さんやチャイルドラインさんにつながらずに孤独感を感じている方々が
いらっしゃる現状を受け、補完的活動を行うことを目指して設立いたし
ましたので、

電話を受けるのは、非公表の所定の場所で、体調を万全に整えたボラン
ティアが受けるという鉄則を守る必要がありますが、私ども法人では未
だ平日にそうできる人員体制が整っておらず、一方で需要があるため、理
想と現実を勘案し、段階的に本来あるべき姿に近付けて行きたいと考
えています。

Q4 どんな相談が多いのか？相談して来る子の年代は？

A 現在、当法人にかけて来る子のほとんどが中学生・高校生で、進路
についての悩みなどが多く寄せられます。

小学生からの電話は少ないですが、最近だと「話題の映画を見に連れて
行って貰う約束だったのに連れて行って貰えなかった。みんなの話につ
いていけない」などのお話も寄せられます。

いじめや虐待・体罰などで苦しんでいる子の多くが

「『秘密を守る』と言っているけど本当か？学校や警察に連絡されない
か？」

「お説教や意見の押しつけはしない』と言うけど本当か？」

『それぐらいで悩むな。もっと大変な人はいっぱいいる』と叱られるん
じゃないか」

など、不安を抱え、本当に話して大丈夫か迷いながら電話をし、
話しやすい内容から話して電話を受けるボランティアの姿勢を見極めてい
る事例が多くあり、数か月間、気持ちに寄り添い続けることで漸く、「実
は…」と

最も聞いて欲しかった思いを打ち明けてくれる場合も少なくありません。

「たったこれだけのことで悩むの？」と聴き手の価値観で悩みの軽重を図ることは避ける必要があります。

中には一言「馬鹿」とか「死ね」とか暴力的な言葉を言って切る子や、深刻な内容なのに声が笑っていて、後ろからも仲間と思われる別の人の笑い声が聞こえ作話である可能性が考えられる事例もありますが、其の場合も、電話を受ける者がどの様な対応をするのか試していることが考えられます。

孤独や不安を感じて電話して来る子どもたちは大人のことを「信じたい」という思いと「信じられない(信じて傷つくことを避けたい)」という思いのどちらも感じている場合があることを理解し、すぐに気持ちを通じ合わなくても、いつか通じ合える時が来るかもしれない、という長期的視点で待つ姿勢が必要です。

虐待や体罰・いじめなどの相談でないからと軽視することをせず、どんな話にも真剣に耳を傾けることで、安心してお話して貰えると私たちは考えています。

Q5 私自身、辛い思いを沢山して来たので、人の痛みを理解し受け止められると思う。相談員になりたいがどうしたらいいか？

A まずはご自身のお気持ちとしっかり向き合い、ケアされることをお勧めいたします。

電話をかけて来てくれた子の話を聴くことで電話をかけて来てくれた子の気持ちが楽になったり問題が解決して感謝してもらえた際には、ボランティアとして大きな喜びを感じます。

しかし、その様な事例はごく稀で、一見するとたわいもない話で終わったり、毎回何度も同じ話をしたり、Q4に対する答えで述べた様に中には、電話を取るなりいきなり「馬鹿」とか「死ね」とか暴力的な言葉を述べて沈黙したり切ってしまう場合もあり、「何のために活動しているのか。この活動で本当に若年者の力になれるのか？」と疑問を感じてしまう場合も少なくありません。

「真剣に丁寧に向き合い続けたら、いつか信頼して貰える日が来る《かもしれない》」

という粘り強さが必要です。

そして何より《自分の領域と相手の領域》を踏まえる姿勢がとても大切です。

人の力になりたいという気持はとても尊いですが、良い意味で《人は人、自分は自分》という認識がなければ、ご自身が傷付く危険があり、同時に、電話をかけて来る若年者を善意や正義漢に基づいて支配しようとしてしまう危険があります。

又、電話を切った後に、

「何である時、こんなこと言ったんだらう」

「何である時、あんなこと聴かなかったんだらう」

と自己嫌悪に感じることも多々あり、研修やスーパービジョンの際に其のことを周りから尋ねられると、恥ずかしさで逃げ出してしまうことも多々ございます。

「電話を取ったのが私じゃなくて他の人だったらもっと力になれたはずなのに…」と自分を攻めてしまうことも珍しくありません。

これらの重圧に耐えることができなければ、いくらプロでないボランティアとは言え、電話受け手としての役割を果たすことはできません。健康な人でもスーパーバイザーや仲間の支えがなければ続けることが難しい活動で、精神疾患をお持ちの方やかつてお持ちだった方は、症状を悪化させたり再発させてしまう可能性があります。

精神疾患に罹患していなくても、傷ついたご経験を過去のストーリーとして受け止める段階に至っていない方には、ご自身を守るためにも慎重なご検討をお願いいたします。

電話を受ける活動以外にも、広報や庶務など法人として必要な役割が多くありますので、裏方スタッフとしてご協力頂くことをご検討して頂けましたら幸いです。

前述の厳しい条件をご理解頂いた上で、電話受け手ボランティアに応募して下さる方につきましては、個別にご相談させていただきますので、ご一報下さい。

当面、集団での電話受け手ボランティア養成講座の開講は予定していませんが、当法人の推奨する他団体の研修を受講して頂いたり、当法人の推

奨める図書をお読み頂きレポートをご提出頂いたり、実際の電話応答の訓練を通して適性を見極めた上で、電話受け手ボランティアに相応しいと判断した方につきましては、ご一緒に活動に加わって頂きたいと考えています。

3. 〈寄稿〉

一般社団法人おかえり基金

理事長 土井 高德先生

私が運営する「土井ホーム」にやってくる子供を観察していると、いままで信頼できる大人との出会いがなかったのではないかと思えてならない。じっくりと話を聞き、人生の波瀾の時期である思春期の中で伴走してくれる人が身近にいれば、人生も違ったものになったであろう子供が少なくない。

通常、周囲でそうした信頼できる大人は、親である。しかし、虐待やDVを始め、信頼し、安心を与えることができない親が増えてきたのが、現代社会の病理である。

ひとは、心の中に親のモデルが生きていると、力強く、人生を前に進めることができる。うちに来る子どもたちはそういうモデルを持っていない。だから、私たちは暮らしの中で、そのモデルになるように、提示してきた。

このような暮らしを通じて、子供の内面に「内的ワーキングモデル」ができて、私たちがいなくても心の中にイメージが残り、いつも語りかけたり、励ましてくれるようになったら、真の意味での自立である。

その意味で、土井ホームは暮らしの場所であると同時に、お互いの存在や関係性、生活空間自体が「治療的共同体」でありたいと考えてきた。その基礎には、二度と傷つかない「安全感」がなければならない。食事や睡眠が重視され、何より食卓やリビングで交わされる会話が、ほかにない自分への尊厳を高めるよう、交わされる。

こうした暮らしを共にしなくても、代替的な場が必要である。子供がSOSを発信した時に、それを確かに受信してくれる存在やネットワークである。

